

東西楼・南門の復原案の再検討

— 第一次大極殿院の復原研究 2 —

1 はじめに

第一次大極殿院東西楼および南門の復原案は、『平城報告 XI』(1982)、『1/100模型案』(1993)、『平成13年度案』、『平成14年度案』で検討されてきたが、これらの復原案はそれぞれ異なっている。

そのため今回、第一次大極殿院の復原研究をおこなうにあたって、既往の復原案を再検討して、今後の復原に向けた問題点をあきらかとし、今後、検討すべき事項を抽出した。その概略について述べたい。

2 東西楼

発掘遺構の概要 桁行5間(15.5尺等間)×梁行3間(13尺等間)の総柱の遺構で、側柱掘立柱(一部礎石建)内部を礎石建とする。

既往の復原案の比較 東西楼の復原案の大きな変更点は以下のとおりである。

『平城報告 XI』では側柱を通柱、屋根を入母屋造として復原した。『1/100模型案』では、『平城報告 XI』と同じく側柱を通柱とするが、屋根を切妻造とした。このように『平城報告 XI』・『1/100模型案』では掘立柱である側柱を構造的に重要であると考えて通柱とし、上層を逋減させない案を提示してきた。これに対し、『平成13年度案』では、柱を管柱として上層を逋減させ、入母屋造とする案へと変更した。『平成14年度案』では、柱を管柱とする点は『平成13年度案』と同様であるが、上層を逋減させる案と逋減させない案の2案を提示した。

このように、これまで5つの復原案が提示されてきたが、それぞれ形状が異なる。よって既往の復原案について、柱、屋根、小屋組・天井、逋減、柱盤、下層天井、組物、中備、腰組、下層柱間装置、上層柱間装置の11項目に分け、復原案として採用した根拠や類例を分析した(表7)。

問題点と課題 東西楼は①礎石掘立柱併用であるという点、②巨大な柱根、③深い柱穴、④巨大な抜取穴といった特殊な遺構であり、これらの点は側柱の構造(通柱・管柱)を考える上で重要である。しかし既往の復原案で

は上部構造の検討に力点が置かれ、これらの点の検討は十分とはいえない。また2002年度に西楼の発掘調査がおこなわれ、新たな情報が増えている。そのため発掘遺構の再解釈、特に構造面、施工面からの発掘遺構の検討が必要である。東楼から出土した雛形についても、建物と雛形の関係や雛形の位置づけなど、検討の余地がある。今後の方針 大きく①東西楼の発掘遺構および礎石掘立柱併用建物の発掘遺構の類例、②現存遺構の類例、③絵画資料の検討をおこなう。

①については、礎石掘立柱併用建物の発掘遺構の類例調査や平城宮跡出土の雛形と建物の関係を検討する。特に第一次大極殿院で唯一、掘立柱を用いた建物であることについて構造的な検討および遺構解釈が重要である。

②については、日本の古代建築および前近代の楼門および楼造建物の現存遺構を調査対象とする。また屋根構造については、既往の復原案の検討では、隅の間が長方形となることから、隅木の納まりが問題となってきた。しかし屋根構造を決定する根拠は、出土した隅木蓋瓦のみであり、寄棟造と入母屋造の両方が考えられる。そのため寄棟造(振隅)を考慮する必要がある。

さらに今年度、韓国の寄棟造・入母屋造の現存遺構には、隅の間が正方形でない例や身舎のみのものが存在することを図面で確認した。さらに通柱の事例も多数あり、中国・韓国をはじめとする東アジアの建築の類例が復原の参考となることがわかった。ただしこれらについては資料や図面が限定的であり、現地調査の必要がある。

③については、絵画資料の調査によって宮殿建築の構造意匠の検討をおこなう。

3 南門

既往復原案の比較 南門の発掘遺構は階段と基壇の一部のみであり、柱位置は不明である。そのため南門の上部構造の復原には発掘遺構の検討が重要である。

既往の復原における大きな問題点は基壇規模、重層か単層か、柱配置の3点である。

『平城報告 XI』では、基壇規模を東西28.0m(94尺)×南北15.6m(52尺)とする。そして上部構造の復原案では、柱配置を桁行5間(中央3間17尺、脇間15尺)、梁行2間(20尺等間)とし、基壇の東西の出が小さくなることから屋根構造を切妻造とし、単層した。なおこの際には楼門形

表7 東西楼の既往復原案の比較

	『平城報告XI』 (1982年)	模型案 (1993年)	平成13年度案 (2001年)	平成14年度案1 (2002年)	平成14年度案2 (2002年)	
柱	形式	側柱：通柱 下層入側柱：東柱 上層内部柱は無し	側柱：通柱 下層入側柱：東柱 上層も総柱	全て管柱 上層も総柱	全て管柱 上層内部は柱無し。	全て管柱 上層も総柱
	根拠	通柱：太い柱根 礎石建の柱は床を支える東柱と解釈 カ	通柱：太い柱根 礎石建の柱は床を支える東柱と解釈。上層柱は、 大梁を架けないため。	入母屋造とするために真隅とする必要があり、柱 盤を用いて上層も総柱とする。	側柱の掘立柱は、重心が上層にあり、下 層が開放空間であることによる構造的 に不安定解消のため。	側柱の掘立柱は、重心が上層にあり、下 層が開放空間であることによる構造的 に不安定解消のため。
屋根	形式	入母屋造	切妻造	入母屋造	入母屋造	入母屋造
	根拠	隅木蓋瓦	下層平面が真隅でない	入母屋造：隅木蓋瓦。 切妻造では妻銅葺の出が8尺に対し、鎌羽を9 ～10尺出すことになり構造的に困難。 寄棟造の否定根拠は大棟が短く見える点、現存遺 構の構造類型が皆無。	入母屋造の隅木蓋瓦。 寄棟造の否定根拠は大棟が短く見える 点。	入母屋造の隅木蓋瓦。 寄棟造の否定根拠は大棟が短く見える 点。
小屋組・ 天井	形式	二重虹梁・斗束・又首	三重虹梁葺	天井を張り、東・梁による架構	大虹梁葺。天井は小屋裏を隠すため に天井を張るものと化粧屋根裏の2案	大梁を架ける。天井は小屋裏を隠すため に天井を張るものと化粧屋根裏の2案
	根拠	不明	二重虹梁葺では勾配が緩く、又首では大極殿四 連施設の意匠としては貧弱。『年中行事絵巻』(建 礼門・待賢門)や『信貴山縁起絵巻』(内裏東門) にあるように平安時代の宮内の門には三重虹梁葺 殿や四重虹梁葺殿が存在した。	不明	根拠は平等院鳳凰堂中堂・唐招提寺金 堂・東大寺法華堂	根拠は正倉院正倉 大梁と同レベルに天井を張る。
通減	形式	無し	無し	有(一手先以内)	有	無し
	根拠	無し	無し	上層を真隅にして鉛直荷重の流れを考慮。	腰組最上段通肘木にかかる程度	無し
柱盤	形式	下層天井が直接、上層の床 柱盤なし	下層天井が直接、上層の床 柱盤なし	通肘木上に柱盤を載せ、柱盤上に2階床・縁板を 張る。	床板の上に柱盤を置く	柱盤の上に床板を張る。
	根拠	無し	無し	法隆寺経蔵	平等院鳳凰堂裏	法隆寺経蔵
下層天井	形式	下層天井が直接、上層の床	下層天井が直接、上層の床	下層天井を張り、上層床との間に空間	下層天井が直接、上層の床	下層天井が直接、上層の床
	根拠	不明	不明	法隆寺経蔵	平等院鳳凰堂	法隆寺経蔵
組物	形式	平三斗・二軒	平三斗・二軒(軒の出8.7尺)	三手先(出土雛形)・二軒	三手先	大斗肘木or平三斗など手先の出ないもの
	根拠	不明	基壇の出8尺	構造のため軒先は高く、十分な軒の出を確保する 必要がある。 形式は出土雛形。	通減ありにより、基壇までの出が大き くなるため。	基壇の出8尺
中備	形式	上層：間斗束カ？ 下層：間斗束	上層：不明 下層：間斗束	上層：間斗束 下層：不明	上層：不明 下層：不明	上層：不明 下層：不明
	根拠	不明	不明	不明	不明	不明
腰組	形式	一手先・挿肘木	二手先・挿肘木	二手先(下層内側は出三斗)	二手先	出三斗
	根拠	不明	不明	不明	根拠は三手先組物との関係か。隅又首 は隅柱から外だけに設け、内部には通 さない。	不明
下層柱間 装置	形式	正面中央三間：扉口 正面両脇間：白壁 それ以外：開放	正面中央一開：扉口 正面両脇間：白壁 それ以外：開放	正面中央三間：扉口 正面両脇間：白壁 それ以外：開放	未提示	未提示
	根拠	回廊と樓の基壇高さがほぼ同一で あると考えられ、回廊と樓は一体 の空間と考えられる。	回廊と樓の基壇高さがほぼ同一であると考 えられ、回廊と樓は一体の空間と考えられる。	回廊と樓の基壇高さがほぼ同一であると考 えられ、回廊と樓は一体の空間と考えられる。	門としての機能を持たせ扉口とするの か、壁として遮蔽するのか。基壇外と の関連で石段をもうけるのか。	門としての機能を持たせ扉口とするの か、壁として遮蔽するのか。基壇外と の関連で石段をもうけるのか。
上層柱間 装置	形式	正面中央三間に扉口 正面両脇間：連子窓	正背面：開放 両側面：白壁	全て開放	未提示	未提示
	根拠	不明	望楼機能	不明	壁・窓・扉(建物用途との関連性大)	壁・窓・扉(建物用途との関連性大)

式も検討した。

『1/100模型案』では、基壇規模は『平城報告XI』を踏襲し、東西楼を含む第一次大極殿院南面の立面への配慮と、『続日本紀』に記される「重閣門」が第一次大極殿院南門に相当するとして、重層入母屋造とした。その際に法隆寺中門を参考として梁行3間門とし、柱配置を桁行5間(中央3間17尺、脇間12尺)、梁行3間(12尺等間)として復原した。なおこの際には軒の出が大きくなるため、慈恩寺大雁塔マグサ石の線刻仏殿図を参考に二手先組物を採用した。

平成14年度には実測図を再調査し、基壇規模は東西96尺×南北55尺という値が示された。また「重閣門」が第一次大極殿院南門に相当しないという解釈の見直しがおこなわれた。この点については今年度、再確認した。その結果、『平成14年度案』では桁行5間(17尺等間)、梁行2間(20尺等間)の単層切妻造とし、適切な屋根勾配とするために四重虹梁葺の架構を採用した。

問題点と課題 南門については基壇規模が2通り提示されてきた。今年度、この点について野帳を再検討し、基壇規模は東西96尺×南北55尺と判明した。また既往の復原では南門の階段幅が中央3間の柱間と考え、北面の階段幅51尺から中央3間を17尺等間としてきた。しかし北面階段と南面階段で階段幅が異なることから、南面階段および中央3間の柱間について、さらなる検証が必要である。

さらに重層とする場合、二重門と楼門の2案が考えら

れるが、『平城報告XI』を除き、楼門案について十分な検討がなされていない。

今後の方針 門の発掘遺構の類例を分析し、単層門と重層門の遺構の傾向を把握する。同時に門の平面から上部構造の形式を推定するため、前近代の門の現存遺構の類例についても分析する。

宮殿の門については、日本の遺構が限られており、東アジアに現存する宮殿建築および発掘遺構の調査も必要であろう。また絵画資料を分析し、宮殿建築の構造・意匠の傾向を把握する。

南門と築地回廊との取り合いについても、絵画資料の調査および現存遺構の類例調査が必要である。

4 おわりに

第一次大極殿院の東西楼・南門は現存遺構に類を見ない建物で、既往の復原案も多様であり、今後の上部構造の復原も困難を極めることが予想される。今回の復原研究においては、東西楼・南門の発掘遺構の検討を軸とし、特に既往の復原案では不足していた発掘遺構の類例の検討をおこない、上部構造の検討を進める。既往の復原検討と同様に、現存遺構や絵画資料の調査もおこなう。

また資料や図面によって中国・韓国といった東アジアに、復原の参考となり得る現存遺構があることを確認しており、これらの現地調査も継続する予定である。

(海野 聡)